



○ニホンジカ、イノシシ等の生息状況等調査について

1 概要

愛知県ではニホンジカ、イノシシ、ニホンザル及びカモシカについて、管理が必要であることから、第二種特定管理鳥獣計画（「特定計画」という。）を策定し、関係機関と連携し、各種取組を進めています。

現行の特定計画が来年度（2026年度）で終了することから、今年度（2025年度）、これまでの取組成果と今後必要な取組を検討するため、基礎情報の収集を目的とした各種調査を実施しています。

2 調査概要

（1）アンケート・聞き取り調査

近年の生息・被害動向や対策状況等を把握するため、市町村、農業協同組合、森林組合、狩猟者団体等を対象に実施

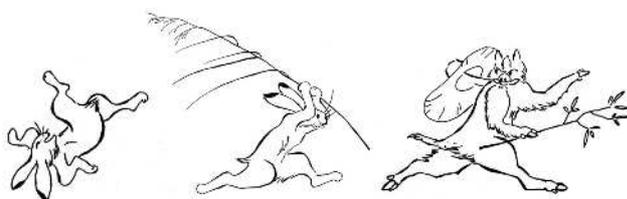
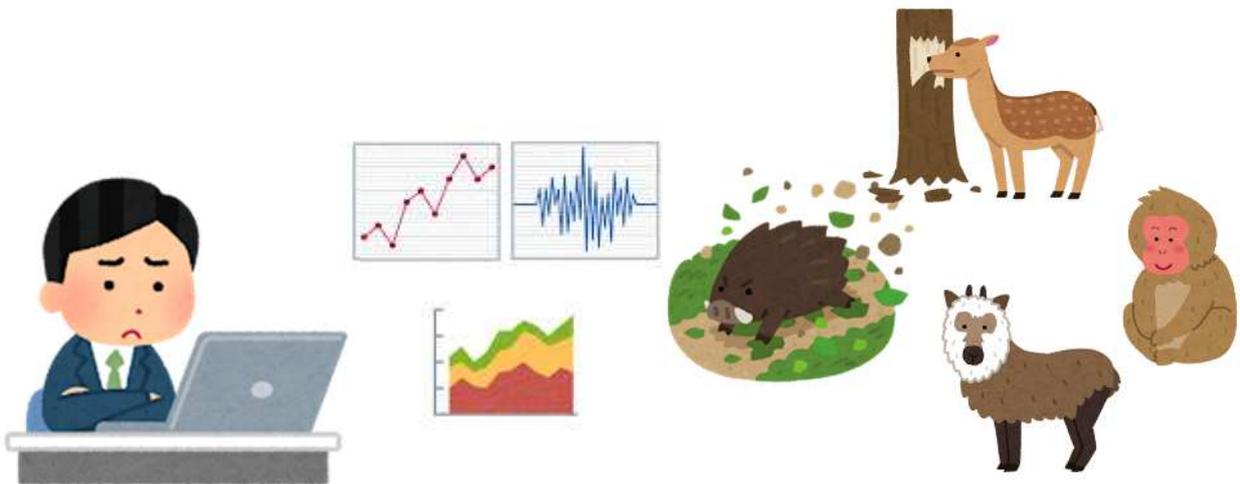
- ・アンケート（郵送）：8月実施済み
- ・聞き取り（対面）：9～11月予定

（2）カメラ調査：県内30メッシュ（5km×5kmメッシュ）で実施

- ・撮影頻度指数用（静止画）：9～11月（25メッシュ）
- ・RESTモデル法用（動画）：〃（5メッシュ）

（3）その他現地調査

- ・糞塊法：10～11月（県内計30ルート）
- ・区画法：〃（県内5区画）





3 今後の流れ

8月に実施したアンケート調査について、回答に御協力いただきありがとうございました。

今後、聞き取り調査を実施していきますが、調査受託事業者（日本工営都市空間株式会社）から、日程調整の連絡をさせていただきますので、引き続き御協力をお願いします。

また、カメラ調査や各種現地調査を実施するため、調査員が山林に出入りします。調査場所によっては、有害捕獲用のわなの近くを通ることもあるかと思いますが、生息動向を把握するために重要な調査ですので、御理解いただきますようよろしくお願いいたします。

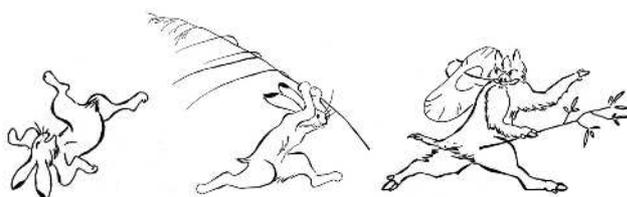


4 参考資料

現行の第二種特定鳥獣管理計画はこちらからご覧いただけます。

(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/shizen/chouju2shu.html>)

(KN)





○狩猟に興味を持つ若者の意識調査

(1) アンケート調査

近年、狩猟に興味があり、狩猟免許を取得する若者が増えていると言われていますが、免許を取得したものの、捕獲をしないまま免許が失効する人もおり、実際の捕獲現場に繋がっていない課題があります。そこで、狩猟に興味がある大学生を対象にアンケートによる意識調査を行いました。

設問は下記のとおりで、人間環境大学江口准教授と明治大学狩り部の協力により、首都圏をはじめとした全国8大学の狩猟系サークルや環境系ゼミの学生15名から回答を得ました。ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

狩猟に興味がある若者（大学生）へのアンケート

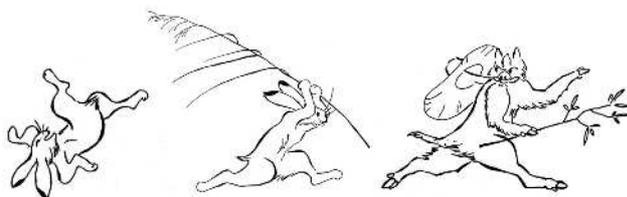
- 問1 大学名・学部学科・学年・性別
- 問2 現在、所持している狩猟免許の種類
- 問3 現在使用している猟具及び経験
- 問4 捕獲している狩猟鳥獣
- 問5 狩猟に興味を持ったきっかけ（具体的エピソード）
- 問6 実際に狩猟するにあたり、ハードルになっていると思うこと（1人5点）
- 問7 どのような狩猟セミナーがあれば参加したいか（複数回答可）
- 問8 想定される大学卒業後の姿

(2) 結果及び考察

表のとおり、自ら捕獲する経験ありが4名、狩猟への同行・解体経験ありが5名、現場経験無しが6名でした。また、狩猟に興味を持ったきっかけは、野生動物に興味があったが5名、ジビエや骨・毛皮・角の利活用に興味があったが4名でした。

大学生が狩猟をする上でハードルになっていると思うことについて、11名が「捕獲する場所が遠い、行く手段が無い」と回答しました。回答者に都心の学生が多いため、自家用車を持っていないことから「行く手段が無い」との回答が多数でした。学生を対象にしたセミナーや体験イベントを開催する場合は、公共交通機関でアクセスできる場所が望まれるでしょう。続いて、8名が「狩猟する場所が無い」、「技術を教えてくれる人がいない」と回答しました。

希望するセミナーでは、体験型研修の希望が多くありました。また、若者は、単独猟や仲間内のグループ猟を望んでいるという印象でしたが、「先輩狩猟者とのマッチング」、「わな捕獲技術の向上研修」が最も多かったことから、先の設問の回答「技術を教えてくれる人がいない」でもあるとおり、先輩狩猟者から技術を学びながら狩猟をしたいという声





多いということも分かりました。

また、狩猟に興味を持った都心の学生が、卒業後どのように狩猟に関わりたいかという調査では、すべての学生が市街地に居住すると回答していますが、「狩猟イベントに参加したい」が6名、「休日は出猟したい」が5名、「平日も出猟したい」が2名と、卒業後は、市街地に居住するが、何らかの形で狩猟に関わりたいという学生が多く、このことから、狩猟を観光資源としたイベントの需要も感じられました。

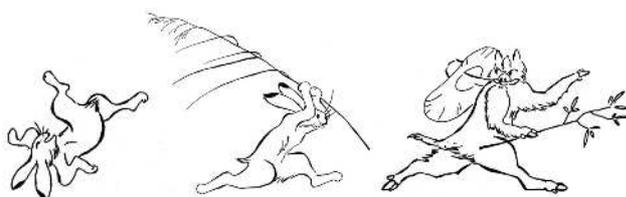
このように、体験型のセミナーとマッチングで興味がある若者を拾い上げることで、実際の捕獲現場に繋げていくことができるでしょう。

(S A (企画課資料提供))

表 狩猟に興味がある大学生へのアンケート結果

狩猟経験	回答数
狩猟への同行・解体経験あり	6
狩猟・解体の現場に行ったことがない	5
自ら捕獲する経験あり	4

狩猟に興味を持ったきっかけ	回答数
野生動物に興味があった	5
サークルの新歓で興味が沸いた	3
ジビエや毛皮・角の利活用に興味があった	2
中山間地域、農村の課題に興味があった	1
授業・ゼミ活動で興味が沸いた	1
知人、友人に誘われて	1
骨が好きだった	1
珍しいものが食べられると言われて(虫含む)	1

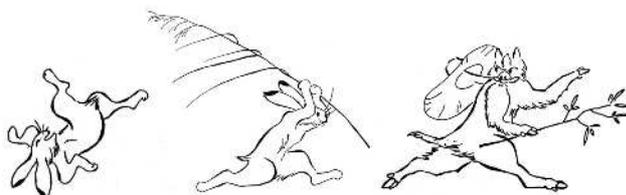




大学生がハードルだと思っていること	回答数
狩猟する場所が遠い、行く手段が無い	11
狩猟する場所が無い	8
技術を教えてくれる人がいない	8
毎日の捕獲確認ができない	7
捕獲の現場を知る機会が無い	6
狩猟や有害捕獲の制度がよく分からない	6
解体場所が無い	6
猟銃の所持許可の取得	5
捕獲個体の処分方法が分からない	4
止め刺し時の危険性	4
道具や機材が高い	3
家族の理解が得られない	3
狩猟免許の受験に必要な医師の診断書が取得できない	2
狩猟登録に必要な入れる保険が無い	1
狩猟から解体までの一連の作業が大変	1

希望するセミナー	回答数
先輩狩猟者(猟友会員)とのマッチング	9
わな捕獲技術の向上研修(設置、誘引方法の研修)	9
解体体験	6
わな捕獲体験研修(宿泊研修)	6
狩猟者による講演会	5
銃猟体験(銃猟、巻き狩りへの同行)	4

想定される大学卒業後の姿	回答数
市街地に居住するが、狩猟イベントには参加したい。(受動的関与)	6
市街地に居住するが、休日は出猟したい。(能動的関与)	5
農村部や山林に隣接した市街地に居住し、平日も出猟したい。	2
市街地に居住するので、狩猟を続けることは難しい。	2





○イノシシの捕獲頭数について【2025年度第1四半期速報】

県内の有害鳥獣捕獲及び指定管理鳥獣捕獲等事業により捕獲されたイノシシの頭数について、2025年度第1四半期（4月から6月まで）がまとまりました（表）。

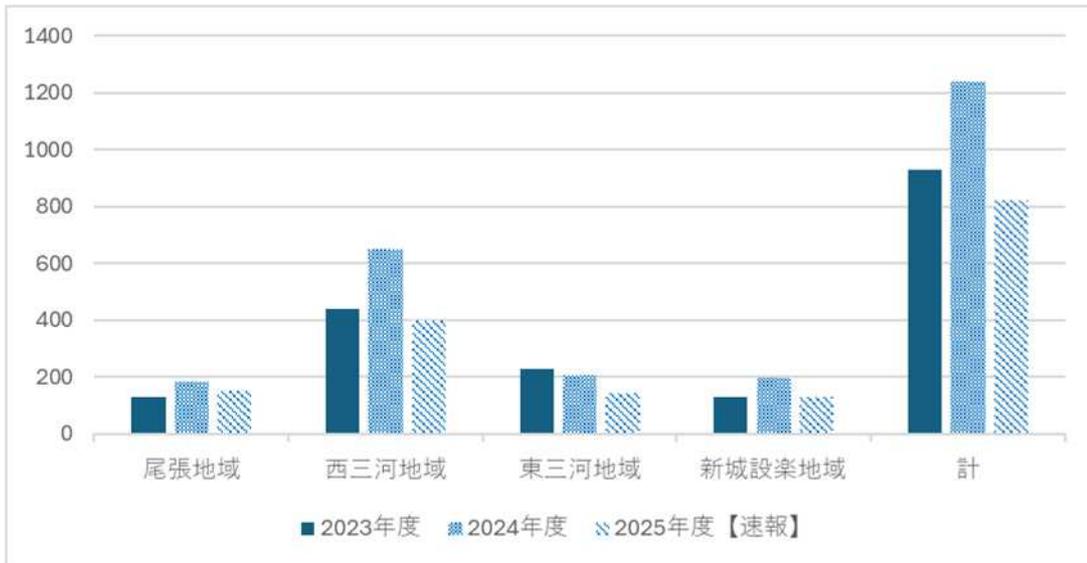
第1四半期の県全体の捕獲頭数は、2025年度（速報値）823頭で、すべての地域で前年度同時期より減少しています（図）。

引き続き、市町村による有害鳥獣捕獲に加え、県による指定管理鳥獣捕獲等事業（委託事業）を行い、高い捕獲圧をかけていきます。

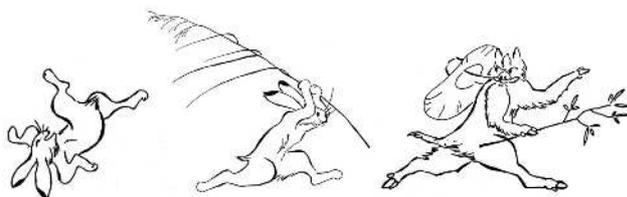
表 直近3年度の地域ごとの野生イノシシの捕獲頭数（頭）

	第1四半期		
	2025年度	2024年度	2023年度
	【速報】		
尾張地域	153	182	130
西三河地域	399	653	438
東三河地域	143	207	230
新城設楽地域	128	196	131
計	823	1238	929

図 野生イノシシの捕獲頭数の推移（第1四半期）



(YK)





○野生イノシシのアフリカ豚熱対策について

○アフリカ豚熱（ASF）とは

飼養豚及び野生イノシシが罹患する極めて致死率が高いウイルス性の疾患であり、発生した場合の畜産業界への影響が甚大であることから、我が国の家畜伝染予防法において「家畜伝染病」に指定されています。環境中や肉製品に混入したウイルスの感染能力が、長期間に渡って維持されることから、一旦侵入を許してしまうと、根絶は難しくなります。また、ワクチンが未開発のため、対策は飼養衛生管理の徹底と早期摘発・除去に限定されます。

○ASFの発生報告状況

2024年10月31日時点で、インド以東のアジアにおいては、日本、台湾を除く国/地域で発生が確認（図1）されており、危機が目前に迫っています。

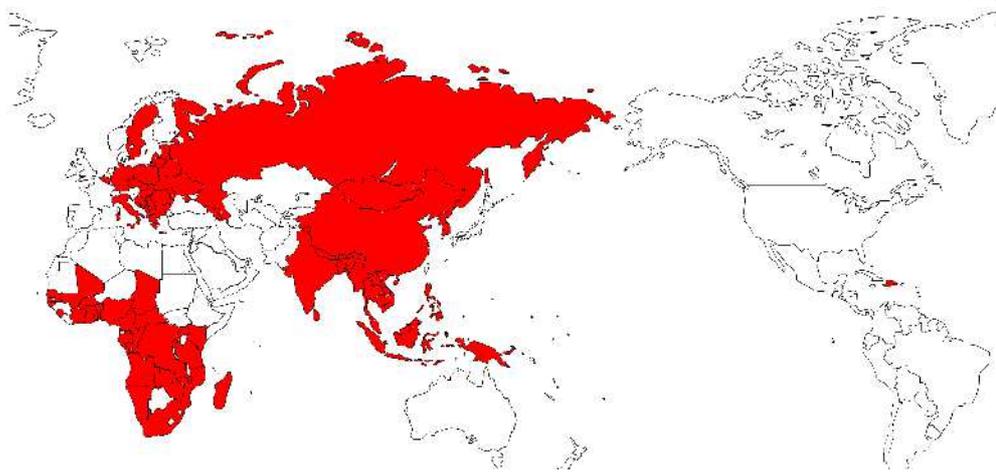


図1 全世界でのアフリカ豚熱の発生状況(2024年10月31日時点)

■ 2005年以降 WOAH 等に発生通報のあった国/地域

出典：農林水産省ウェブサイト

○国による対策

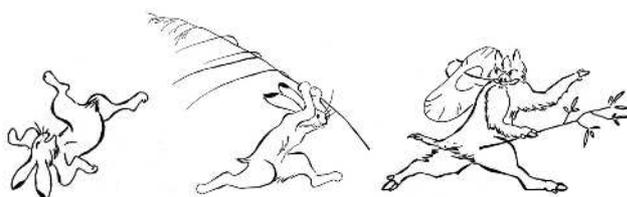
空港及び海港において、入国者の靴底消毒・車両消毒、旅客への注意喚起、検疫探知犬を活用した手荷物検査などの水際での動物検疫措置を徹底しています。

○県による対策

国の基本方針に沿って、2024年6月に愛知県 野生いのしし豚熱・アフリカ豚熱対策実施要綱(愛知県実施要綱 イノシシ編)を制定しました。

○具体的な防疫活動

野生イノシシにおけるアフリカ豚熱発生時には、農業水産局に防疫部会が設置されます





(図2)。防疫部会は4班体制とし、感染個体が確認された地点に近い施設に防疫対策拠点を設けます。県職員を防疫スタッフとして拠点に派遣し、関係市町村及び狩猟者団体などの関係機関からの協力を得ながら防疫措置を実施していきます。

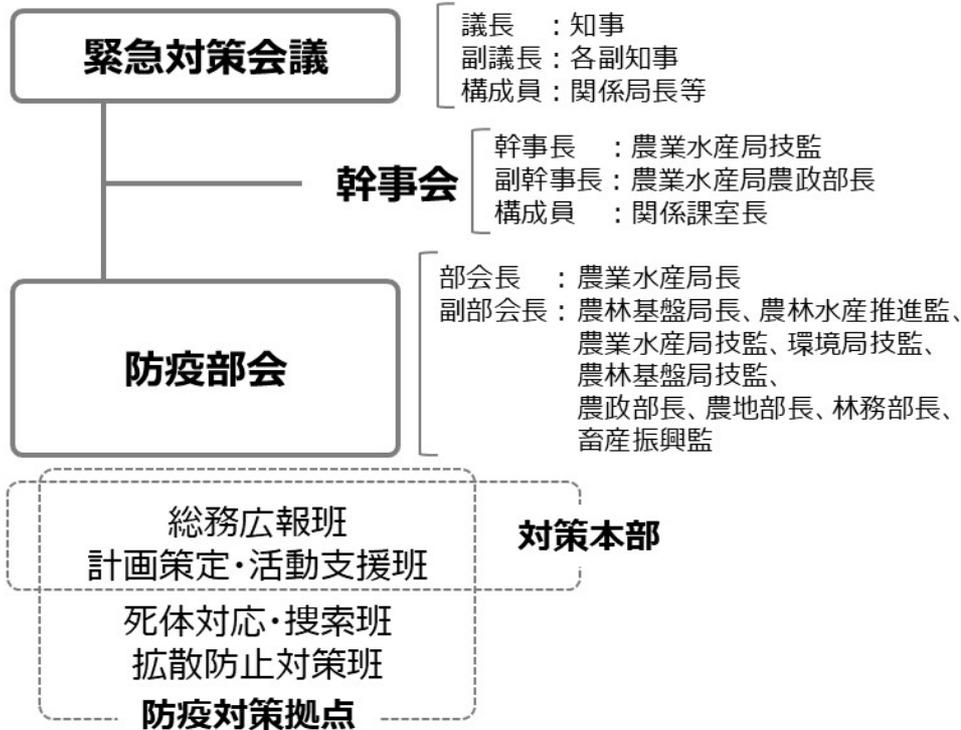


図2 野生イノシシの防疫体制（愛知県実施要綱より）

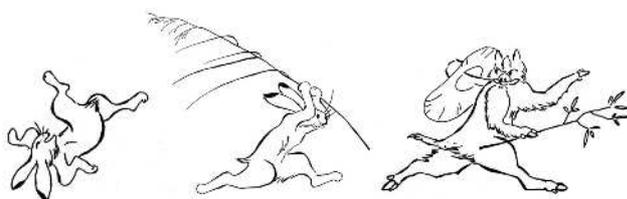
○万一の発生に備えた人材育成活動

計画作成から現場活動に至るまで、防疫活動をリードする県職員の育成は急務です。2024年度は県職員を対象に机上演習を3回、実施演習を1回実施しました（図3）。今年度も、基本事項習得のための研修会、防疫措置に関する机上及び実地演習を実施及び予定しています。



図3 実地演習の状況（2024）年

(AH)





☆あいち鳥獣通信のバックナンバーは、
野生イノシシ対策室の Web ページ
「[野生鳥獣資料室](#)」で公開中

